

世界に羽ばたけ！ 米山学友④

地球の裏側から日本への愛をこめて

世界遺産の中の日本庭園

ユネスコの世界文化遺産の一つ「カラカスの大学都市」。中心となるベネズエラ中央大学は国の最高学府であり、キャンパスには20世紀前半のモダニズムを代表する建造物と芸術作品があふれています。その建築学部棟の一角に、米山学友のノアイン・アマリア・ギンゾさんが施工にかかわった、小さな日本式の坪庭があります。

2002年4月、ノアインさんは建築学部大学院課程の授業として日本庭園設計講座を企画。彼女が任命した講師が講座の半ばで急逝したため、遺された設計図をもとに、学生たちを指揮して日本庭園を完成させました。

「留学した7年のうちに、私の心の半分は日本に奪われました」というノアインさん。日本に対する深い愛情がつくりだした庭は、東洋的な癒やしの空間として、多くの人に愛される場所となっています。

いつか必ず日本に行きたい

彼女が日本という国の名を初めて耳にしたのは9歳のとき。所属していた学校のオーケストラが、中国、韓国、日本への演奏旅行に行くことになったからでした。

公演のために練習した日本の曲は不思議で、神秘的な響きをもち、はるか遠い国「ニッポン」へのあこがれをかき立てられるものでした。しかし、両親からは「言葉も通じない国で迷子になったらどうする」と反対され、演奏旅行への参加はかないませんでした。

「わかったわ。今回はあきらめる。でも、私はいつか絶対に日本に行くんだから」

時がたち、大学4年生のとき、食堂で熱心に漢字を勉強する友人の姿を見かけました。「日本で修士課程の勉強をするために、



ベネズエラ中央大で、卒業生に向けスピーチするノアインさん（写真左と、彼女自ら設計したノルウェー大使公邸

日本語を勉強しているんだ」という彼の言葉に、道を見いだしたノアインさんは早速、日本語を勉強し、日本政府の国費留学生試験の準備を始めました。2度目の挑戦で晴れて合格。日本に留学できる5人のうちの1人に選ばれたのです。

1992年4月来日の翌朝、大阪千里万博公園に、満開の桜を愛でながら歩くノアインさんの姿がありました。9歳のときの誓いを、23歳で見事にかなえたのです。

ロータリーの支援に一生の感謝を

大阪での半年間の語学研修終了後、三重大学で研究生として1年半を過ごし、1994年4月に千葉大学大学院の修士課程に入学しました。来日後2年間は雨の多さに^{へきえき}辞易したり、言葉の問題から親しい友人をつくれずに寂しい思いをしたりもしましたが、千葉大学では彼女の明るさと積極性が受け入れられ、よき師、よき仲間を得て、研究も順調に進みました。

博士課程に進学し、最終学年で米山記念奨学生に選ばれると、ようやくアルバイトから離れて研究に専念できるようになりました。世話クラブの千葉港ロータリークラブとの交流も、日本の文化や社会を深く知りたいと願う彼女にとって、得難い経験となりました。着物を着付けてもらって出席した例会は忘れられない思い出です。その後、浴衣などをプレゼントされましたが、^た帯と下駄は、ベネズエラの自宅にしつらえた畳の和室に今も飾っています。



よねやまだより

「世界理解月間」の今月は、少し珍しい国の学友を取り上げます。ノアイン・アマリア・ギンゾさんは南米ベネズエラから日本に留学し、帰国後、大学教授として建築・都市計画の分野で活躍しています。これまでの米山記念奨学生 1 万 4,000 人以上の中で、ベネズエラ人はたった 6 人。日本から見た地球の反対側の国から、何を求めて彼女は来日し、日本で学んだことを今の仕事にどのように生かしているのでしょうか。

「今でもロータリアンと知り合うたびに、日本で受けたロータリーの支援にどれほど感謝しているか、そして、米山記念奨学会がいかに大切な組織かを話しています」

学位を取って帰国する彼女のために、カウンセラーの宮下進会員やクラブの有志が空港まで見送りに来てくれました。母国での活躍を祈る励ましの声に胸を熱くしながら、1999 年 3 月、ノアインさんは帰途につきました。

日本で学んだ価値観を仕事に生かして

日本は、考え得る限りベネズエラから最も遠い国、それが、ノアインさんが日本に引かれた最大の理由でした。全く異なる人々、文化、建築、自然との出会いを求めて留学した日本での 7 年間は、「期待を上回るものだった」と、彼女は振り返ります。

帰国後、ベネズエラ中央大学の建築学部の教員となり、現在は都市計画研究所の教授として、若手研究者の育成にあたっています。昨年 7 月までの 2 年間は大学院課程の統括主任も務め、建築家としては、2 年がかりで在ベネズエラ・ノルウェー大使公邸の設計・改築を手がけるなど、精力的に取り組んでいます。

日本で暮らしたことで、物事をすぐに正しく行うことや、お互いを尊重することの大切さ、約束したことは必ず守り一生懸命に長時間働くなど、母国とは異なる価値観を学んだといいます。仕事に対する姿勢や責任感、仕事の質そのものが異なる人と働く中で、困難を感じるこ

プロフィール

ノアイン・アマリア・ギンゾ さん

(1998 - 99 年 / 千葉港 RC) ベネズエラ・カラカス出身。ベネズエラ中央大学建築学部卒業後、1992 年に来日。94 年千葉大学大学院修士課程に入学、環境科学の博士号を取得し 99 年帰国。ベネズエラ中央大学建築学部都市計画研究所教授。建築家。



ともありますが、何よりも今の仕事が好きで、建物の設計や都市計画を通じて、人々の生活の質の向上に責任をもつということに、やりがいと誇りを感じています。

「ベネズエラは 1999 年以降、政情不安が続いています。政治や経済が早く安定し、建築の仕事に思う存分打ち込めるようになることが私の第一の願い。そして、いつかまた日本を訪れることが私の夢です。満開の桜の花を、この目でまた見てみたいですね」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

地区ロータリアンがベトナムで奨学生を採用 — 第 2590 地区 —



地区の代表が初めて現地での面接に参加

「現地採用奨学金」は、経済的な理由から来日できない優秀な人材を海外で発掘し、日本に招へいして支援する米山記念奨学金のプログラムです。試行 3 年目となる今回、事前に決定した受け入れ地区(第 2590 地区・神奈川県)から清水良夫ガバナーと地区米山記念奨学委員長・鈴木憲治氏がベトナムへ出向き、面接者として初めて選考に参加。昨年 12 月 18 日の面接の結果、10 人中 2 人の合格者を決定しました。

清水氏は「現地の教育事情や生活レベルを理解することができた」と、実際に足を運ぶことの意義を強調し、鈴木氏も「地区の皆さんに胸を張って紹介できる人材を選ぶことができた」と話しています。合格者 2 人は、今年 10 月に来日予定です。